雑学書庫 知識の記録

数字は増えたのに暮らしは苦しく、貨幣錯覚（Money Illusion）

記事のURL

https://www.gklibrarykor.com/ja/article/11280/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

給与明細に記された数字が去年より大きくなれば、誰でもうれしくなります。ところが同じ年に日々の買い物の物価がそれ以上に上がっていたら、増えた給料で買えるものはかえって減ってしまいます。数字は大きくなったのに暮らしは苦しくなる、という奇妙なことが起きるわけです。それでも多くの人は上がった数字だけを見て、生活が良くなったと感じます。このようにお金の見かけにだまされる心理を説明する言葉が「貨幣錯覚（Money Illusion）」です。 貨幣錯覚とは、簡単に言えば「お金の実際の購買力ではなく、お金に記された額、つまり名目金額を基準に損得を判断してしまう錯覚」を意味します。アメリカの経済学者アーヴィング・フィッシャー（Irving Fisher）が名付け、ジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes）が広く知らしめました。 本記事では、貨幣錯覚が何を取り違えているのかから、それを示した有名なアンケート実験、経済のあちこちに残す痕跡、そしてこの錯覚から抜け出す方法まで、順に見ていきます。 数字にだまされるお金の計算、貨幣錯覚の仕組みと影響 名目金額と実質金額 貨幣錯覚を理解するには、まずお金の価値を測る2つの物差しを区別する必要があります。名目金額（Nominal Value）：紙幣や通帳に記されたそのままの額です。月給300万ウォン、預金金利3%のように、すぐ目に入